



徳島方言における推奨を表す「タラワ」について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2021-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): Recommendation, Conditional, Suggestion, Imperative, Sentence-final particle 作成者: 島田, 武 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00010372

徳島方言における推奨を表す「タラワ」について

島田 武^{*1}

(原稿受付日 令和 2 年 8 月 3 日 論文受理日 令和 3 年 2 月 17 日)

On Expression of Recommendation *-tarawa* in the Tokushima Dialect

Takeshi SHIMADA*

(Received 3rd August 2020, Accepted 17th February 2021)

Abstract

This paper investigates the form and function of *-tarawa* in the Tokushima Dialect. The item can be divided into *-tara* and *wa*. The former is the suppositional form of *ta*, and the latter is a sentence-final particle. They are unified and behave as a single sentence-final particle. The item *-tarawa* stands for three functions: recommendation, suggestion, and imperative. These functions derive from the combinations of addressee's benefit, addressee's intention and/or coercion of an action by the speaker.

Keywords : Recommendation, Conditional, Suggestion, Imperative, Sentence-final particle

1 はじめに

1.1 日本語の「勧め」を表す「タラ形・レバ形」について

日本語において、条件文に現れる主要な接続助詞には「レバ」「タラ」「ナラ」「ト」がある。

- (1) 日が照れば洗濯物も乾きやすいのに。
- (2) 行ければ行きます。
- (3) 終わったら連絡してください。
- (4) 飲み会に来るなら何か食べるもの持ってきて。
- (5) ボタンを押すと光ります。

*1 室蘭工業大学 ひと文化系領域

下線部で示されている通り、通常は2つの文が接続助詞で連結され、複文として現れる。この4つの接続助詞の中で「レバ」と「タラ」には主節が現れない用法があり、白川博之(1995)ではこれを「従属節による言いさしの表現」と呼び、「タラ形・レバ形で言いさして願望や勧めを表す文」⁽¹⁾としている。以下に作例を挙げる。

- (6) いつかアラスカでオーロラが見れたら。
- (7) 汗かいてるし、冷たいものでも飲んだら。
- (8) せめて財布に1万円あれば。
- (9) 立ってないで座れば。

例文(6)と(8)は「タラ」と「レバ」を用いて願望を、例文(7)と(9)は勧めを表している。

これらの文で興味深いのは、形式上従属節のみになり、「レバ」と「タラ」で終わる文を形成するだけであるのにもかかわらず、その表す意味が、条件文本来の意味である仮定条件、確定条件、動作の連続などを離れて、願望や勧めになっていることである。とりわけ、勧めを表す(7)と(9)に関しては、仮に「動詞+接続助詞」のみを取り出したとしても、文脈は変わりこそすれ、勧めの意味は失われない。

- (10) 飲んだら。
- (11) 座れば。

通常の文脈として、どちらも話し手と聞き手がお互いに意志疎通できる状態にあり、話し手が聞き手に対して、(10)であれば、聞き手の手の届く範囲にある飲み物を飲むという行為をするように働きかけていることが想定され、(11)であれば、聞き手が座るべき時にまだ座っていない状態にあるときに座するという行為をするように働きかけていることが想定される。

1.2 徳島方言における「勧め」を表す「タラワ」

同様の現象が、徳島方言の「タラ」にもある。観察のため、(1)から(5)および(6)から(9)を徳島方言に対応させたものを挙げる。ただし徳島方言には「レバ」存在しない(高田豊輝 1985: 192)⁽²⁾ので、「レバ」を「タラ」に変換した。

(12)から(16)は条件文の例で、標準日本語の(1)から(5)に対応する。

- (12) ヒガ テッタラ センタクモンモ カワキヤスイノニ。
- (13) イケタラ イキマス。
- (14) オワッタラ レンラクシテ クダサイ
- (15) ノミカイニ クルンダッタラ ナンカ タベルモン モッテキテ。
- (16) ボタンヲ オシタラ ヒカリマス。

一方、(17)から(20)は願望と勧めを表す例で、標準日本語の(6)から(9)に対応する。

- (17) イツカ アラスカデ オーロラガ ミレタラ。
- (18) アセ カイトーシ ツメタイモンデモ ノンダラワ。
- (19) セメテ サイフニ 1マンエン アッタラ。
- (20) タチットラント スワッタラワ

(12)から(16)の条件構文の例を見ると、「レバ」が「タラ」になっているところ以外はほぼ同一であることがわかる。一方で(17)から(20)の例を見ると、願望の例である(17)は(6)と同じ「タラ」であり、(19)の場合は徳島方言にはないレバがタラに変わっている。さらに、勧めを表す(18)と(20)には、標準日本語

にはない要素である「ワ」が加わっていることに気づく。つまり、標準日本語においては、(10)と(11)が示すように、形式上は条件文の元の形と変わらなくても、「タラ形」と「レバ形」が単独で用いられると、勧めの意味が与えられていたのに対し、徳島方言では以下の(21)と(22)のように文末に「ワ」が付加されるという形式上の変化も伴っているのである。

- (21) ノンダラワ
 (22) スワッタラワ

すぐ上の例で見たように、徳島方言には勧めを表す慣用的な表現が存在する。しかし、これまでの先行研究では、徳島方言の語法に最も詳しいと思われる金沢治(1961)を始めとして、森重幸(1982)、平山輝男・上野和昭(1997)においても、「タラ」、「ワ」、「タラワ」のどれも、勧めの意味があるとして取り上げた例は見つかっていない。⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾

本稿では(21)や(22)に観察されるような、徳島方言における条件を表す「タラ」と文末詞の「ワ」が一体化して「タラワ」となり、勧めを意味する表現について記述を行う。

2 「タラワ」の形式

2.1 統語的特徴

2.1.1 「タラワ」の構成

「タラワ」は形式上、以下のように分解できる。

- (23) (助) 動詞 (未然形) + タラ (完了の助動詞タの仮定形) + ワ (文末詞)

(23)を見ると、標準日本語にも見られる「タラ」形に、文末詞「ワ」が付加されているように見える。ただし、実際には「タラワ」全体が一体化して現れ、「タラ」と「ワ」の間に他の要素が現れることはない。また「ワ」を省略することはできない。例をいくつか以下に挙げる。以下では非文法的な表現に<*>を付けて表す。

- (24) a. ソトハ サムイケン モウスコシ オッタラワ／*オッタラ
 外は 寒いので もう少し いれば
 b. オソーナル イイヨッタケン サキニ タベヨッタラワ／*タベヨッタラ
 遅くなると 言っていたので 先に 食べてたら
 c. オモタイケン ココニ オイトイタラワ／*オイトイタラ
 重いから ここに 置いておいたら

(24a)ではオルという動詞に、(24b)ではヨルという助動詞に、(24c)ではテオクにそれぞれタラワが後続している。

2.1.2 「タラワ」と否定形

次にタラワの前には否定形は生じにくいという事実を見る。つまり、「しないことを勧める」場合は別の表現を使用する必要がある。

- (25) タベタラワ。
 食べたら。
 (26) *タベンカッタラワ。／*タベナンダラワ。
 食べなければ。

- (27) タベルン ヤメトイタラワ。
 食べるの やめておいたら。
 (28) タベルン ヤメタラワ。
 食べるの やめれば。

(25)の「タベタラワ」を否定形にすると、(26)のように「タベンカッタラワ」もしくは「タベナンダラワ」となるが、これらは不自然な表現となる。そして「しないことを勧める」場合は、(27)や(28)のように「ヤメル」という動詞を用いて表現することになる。

2.1.3 仮定形と「タラワ」

2.1.1 節で見たように、「タラワ」の「タラ」は本来、完了の助動詞の仮定形である。この仮定を表す形式に加えて、徳島方言で動詞の仮定形を表す方法として、動詞の連用形に「ヤ」「リャ」を付けるというものがある（平山輝男・上野和昭(1997)）⁽⁵⁾。元々は標準日本語と同様に「レバ」を用いた仮定形であったが、現在は「カキヤ（書けば）」「タベリャ（食べれば）」のように、動詞の連用形と融合した形でしか現れない。このような仮定を表す形式があるのだが、「タラ」と違ってこの形式には「ワ」を付けて勧めの意味を表すことはできない。

- (29) a. ハヨ オキタラ マニアウ ダロ。
 早く 起きれば 間に合う だろう
 b. マニアイタカッタラ ハヨ オキタラワ。
 間に合いたければ 早く 起きたら。
 (30) a. ハヨ オキリャ マニアウ ダロ。
 早く 起きれば 間に合う だろう
 b. * マニアイタカッタラ ハヨ オキリャワ。
 間に合いたければ 早く 起きれば

(29a)と(30a)が示すように、条件を表す接続表現としてはどちらも問題なく生じるが、勧めを表す表現としては、(29b)の「オキタラワ」が文法的なのに対して、「*オキリャワ」は非文法的となる。この事実を考えると、「タラワ」が「タラ+ワ」という独立した要素の合成表現と考えるよりも、「タラワ」全体が一体化したものとして考えたほうが良いかもしれない。というのも、徳島方言において、もし条件文の従属節が独立して使用されることによって勧めを意味し、その意味を表すマーカーとして「ワ」が付加されているとするならば、(30b)の「*オキリャワ」が文法的であってもおかしくはないからである。

2.1.4 主節としての「タラワ」

本稿の第1節で、白川博之(1995)による「従属節による言いさしの表現」という見方を概観し、徳島方言の「タラワ」もその見方に沿って「従属節の独立用法」⁽⁴⁾としてきたが、実は「タラワ節」は別の条件節と共起可能である。

- (31) タベタカッタラ タベタラワ
 食べたければ 食べれば
 (32) マニアイタカッタラ ハヨ オキタラワ。(=29b)
 間に合いたければ 早く 起きたら。
 (33) タベタカッタラ タベナ
 食べたければ 食べろ
 (34) マニアイタカッタラ ハヨ オキナ
 間に合いたければ 早く 起きろ。

(31)や(32)が示すように、「タラワ」のほかに、「タラ」という接続助詞に導かれる節が現れている。この「タラ節」は従属節なのだから、「タラワ節」は主節ということになるのではないだろうか。少なくとも(33)と(34)に表れている、命令を表す文末詞の「ナ」の付加された「タベナ」や「オキナ」が従属節ではないのと同様に「タベタラワ」と「オキタラワ」は従属節ではないように思われる。

2.2 「タラワ」の音調について

「タラワ」には以下のような韻律的特徴がある。

(35) 「タラワ」は文末に上昇調のイントネーションを伴う。

(35)のように、「タラワ」が上昇調のイントネーションを持つために、常に文末の「ワ」を上げて発音することになる。これは標準日本語の言いさし文の「タラ形」と「レバ形」が文末を上げる場合と下げる場合があるのと対照的である。元春英(2010: 202)⁽⁶⁾では、「聞き手に対する話し手の発話に含まれる「ータラ」「ーバ」で文末のイントネーションの上昇や下降を伴うものを対象」として調査を行っている。そこで挙がっている例を引用する。例文中の太字、斜体、矢印は引用元のままとしてある。

(36) もうさあ、付き合うのをやめ**たら** ↑

(37) だったら、萌ちゃんとのけんかも **やめれば** ↑

(38) ちょっと **静かにしたら** ↓

(39) 素直に **喜べば** ↓

(元春英(2010: 202)より引用)

(36)から(39)を見ると、タラ形もレバ形も上昇と下降のイントネーションを持ちうることがわかる。これらに対応する徳島方言で表すと(40)から(43)のようになる。

(40) モウ ツキアウン ヤメ**タラワ** ↑

(41) ホレダッタラ モエチャントノ ケンカモ ヤメタラワ ↑

(42) チョット シズカニ シタラワ ↑

(43) スナオニ ヨロコンダラワ ↑

これらの例では、(35)に従って「ワ」がすべて高く発音されることになる。元春英(2010)に倣えば、すべて上向きの矢印<↑>が付される。実際のイントネーションの型としては、疑問のイントネーションと同じである。標準日本語でも、白川博之(1995: 33)に疑問符を付してある例があるので、上昇のイントネーションを持つ場合には同様であると考えられる。

(44) シャワー**使ったら**？

(白川博之(1995: 33)より引用)

この「タラワ」の持つ上昇のイントネーションは、3.2.3 節で見る「命令」を表せるかどうかにかかわるものである

3 「タラワ」の機能について

2 節では「タラワ」の形式的側面を見てきたが、3 節ではその形式に関わる意味的な側面や機能について見ていく。

3.1 「タラワ」と共起できる動詞の意味

2.1.1 節で見たように。「タラワ」の前には動詞または助動詞の未然形が現れる。この（助）動詞には意味的な制約がある。

- (45) オッタラワ。
居たら。
- (46) キタラワ。
来たら。
- (47) ハシッタラワ。
走ったら。
- (48) *シンダラワ。
死んだら。
- (49) *ニューシニ オチタラワ。
入試に 落ちたら。
- (50) *フラレタラワ。
振られたら。

(45)から(47)の例はどれも問題ない一方、(48)から(50)の例はどれも不自然である。その違いは、動詞の表す行為が聞き手の意志によって行えるかどうかである。「オル」「クル」「ハシル」という動詞はどれも主語、つまり「～タラワ」と言われた聞き手の意志によって行うこともしくは行わないことが選択できる行為を表す。一方「シヌ」「(入試に)オチル」「フラレル」という行為は、主語の意志によって行うこと、もしくは行わないことがコントロールできない行為である。その証拠に、主語の意志を反映できることを表す「テミル」を動詞につけると容認性が上がる。

- (51) シンデミタラワ。
死んでみたら。
- (52) ニューシニ オチテミタラワ。
入試に落ちてみたら。
- (53) フラレテミタラワ。
振られてみたら。

以上をまとめると(54)のようになる。

- (54) 「タラワ」は聞き手の意志的行為を表す（助）動詞とのみ共起可能である。

3.2 「勧め」について

3.2.1 「推奨」の「タラワ」

前節まで「タラワ」節の表す意味に関しては、白川博之(1995)の標準日本語のタラ形の先行研究に従って、「勧め」という用語を用いてきた。しかし以降では「推奨」という用語を用いることにしたい。というのも、「タラワ」が表す「勧め」にはいくつか下位分類が可能であり、典型的には「聞き手がすれば良いと思う行為を、話し手が強制力を持たせずに聞き手に勧める」という機能を持つからである。この機能を「推奨」という用語を用いて表すことにする。

談話の中で、話し手が聞き手に対して「タラワ」節を用いるもっとも典型的な場面は、聞き手が行いたいだろうと考えられる行為を勧める場合である。なお以降の例では「タラワ」節を発話する人物を「話し手」、それを聞く人を「聞き手」と表記する。

- (55) 聞き手：（目の前の食べ物を食べたそうにしている。）

話し手：エンリョセント、タベタラワ。

遠慮しないで、食べれば。

(56) 聞き手：(バスにのってくる友達を待ってそわそわしている。)

話し手：バステイマデ ムカエニ イッタラワ。

バス停まで 迎えに 行けば。

(55)では、聞き手が食べたそうにしている様子から判断して、食べることを勧めている。また(56)は、聞き手がもうすぐ待ち人が来るので落ち着かないことを話し手が知っていて、迎えに行くのが良いだろうと考えた結果の発話である。どちらも聞き手にとって行いたいであろう行為を勧めていて、強制力がゼロであることが重要である。もし強制力を含めて発話する場合には、(55)の場面を例にすると、(57)のように「タラエエ」や命令を表す文末詞「ナ」を用いることになる。

(57) エンリョセント タベタラエエ / タベナ

遠慮しないで 食べればいい / 食べる

3.2.2 「提案」の「タラワ」

次に、聞き手の意志とは関係なく、話し手が聞き手の利益を考えて聞き手にある行為を提案する場合を見る。

(58) 聞き手：ハダザムイナ

肌寒いな

話し手：ホナ ウワギヲ ハオッテイッタラワ。

じゃあ 上着を 羽織っていったら。

(59) 聞き手：モウスグ テスト ジャ。

もうすぐ テスト だ。

話し手：イマノウチニ ベンキョウ シトイタラワ。

今のうちに 勉強 しておいたら。

(58)では、「肌寒く感じた」という聞き手の言葉を耳にした話し手が、聞き手の体調を慮った発話に「タラワ」が使われている。一方(59)では、間もなくテストがあるという発話を踏まえて、早めに勉強しておくようアドバイスした発話に「タラワ」が使われている。どちらの会話においても、聞き手の発話からは、「タラワ」節の行為を聞き手が行いたいと思っていただかどうかは分からない。分かるのは、聞き手の発話を受けて、聞き手の利益になるような行為を提案したことである。この発話場面において聞き手が話し手の提案を受け入れるかどうかは問題にならず、したがって強制力もないのは「推奨」の「タラワ」と同様である。

3.2.3 「命令」の「タラワ」

3.2.2 節の「提案」の「タラワ」と同様の場面で、話し手が聞き手の利益を考慮しなくなると、強制力が上がり、「タラワ」は「命令」の意味を帯びる。

(60) 聞き手：タベキレンカッタケド モウ オナカ イッパイ

食べきれなかったけど もう おなか いっぱい

話し手：サイゴノ ヒトツ タベトイタラワ

最後の 一つ 食べておいたら

(60)では、すでに聞き手が満腹して食べ物を残しているのを知ったうえで、食べきるように聞き手に向

かって「タラワ」を用いている。この状況の「タベトイタラワ」は提案ではなく、「食べきってしまった」や「食べきってほしい」という話し手の願望の表出になっており、その結果、命令の意味を帯びることになっている。

同様の例は標準日本語にも見られる。元春英 (2010: 206)では、「ータラ」の用例に「ある行為を命令する」機能を持つ場合があるとしている。(38)の用例を文字装飾を除いて再掲する。

(61) ちょっと静かにしたら↓ (= (38))

(61)は、子どもがようやく眠ったばかりの時に、再び夫婦喧嘩を始めた実の両親に向かって娘が言うセリフである。場面上「静かにしろ」＋「いい加減にしてほしい」という意味を表すが、形式はタラ節を独立して使用し、また下降調の文末イントネーションを伴っている。ここで「タラ」が用いられているのは、親に向かって命令文を用いて命令するのは憚られるので、願望表出の延長線上で命令を意味できる形式を選択したのだと考えられる。ただし軽い命令の場合は通常上昇調のイントネーションを伴う「タラ」に、下降調のイントネーションを用いていることを考えると、命令の意味は強く含意されることになる。

同じ状況を徳島方言で表すことを考えると、強い命令を意味するときに、「タラワ」は使用できず、他の命令を表せる表現を使用するしかないことが分かる。

(62) a. チョット シズカニ シテダ↓

b. #チョット シズカニ シタラワ↑ (# は場面にふさわしくないことを示す)

(62)に見るように、(61)と同じ意味を表せるのは(62a)の「スルの連用形「シ」＋「テ」＋文末詞「ダ」＋下降音調」の組み合わせ「シテダ↓」である。(62b)の「シタラワ↑」では(61)で表されているほど強い命令は表せないことが分かる。また標準日本語の「タラ」と違って、「タラワ」に備わっている上昇調のイントネーションは文脈によって下降調に変更できないことも分かる。

4. まとめ

本稿では徳島方言における「タラワ」の形式と機能について記述を行った。そこで明らかになったのは以下の通りである。

「タラワ」の表す機能について、今回の分析では「推奨」「提案」「命令」が抽出できた。その際に用いたのが「行為遂行による聞き手の利益」「行為遂行の聞き手の意志」「話し手による行為の強制力」である。これらをまとめたものが以下の表である。表中の○は有り、×は無しを表す。

表 1 「タラワ」の機能

	行為遂行による聞き 手の利益	行為遂行の聞き手の 意志	話し手による行為の 強制力
「推奨」	○	○	×
「提案」	○	×	×
「命令」	×	×	○

表1では、「タラワ」が「推奨」の機能を持つとき、聞き手が推奨された行為の遂行によって利益があること、また聞き手には行為遂行の意志があることが、話し手によって認識されており、同時に話し手による行為の強制が行われないことが分かる。この「推奨」の「タラワ」から聞き手の行為遂行の意志を除くと「提案」になり、さらに聞き手の利益を除いて行為の強制力を加えると「命令」の機能が現れる。¹

一方、今回の分析で判明した問題点は、次の通りである。「タラワ」によって表せる「命令」と、表せない「命令」が存在し、表せない場合は他の動詞の命令形や文末詞や下降音調を用いる。それらの「命令」と「タラワ」が表す「命令」をどのように統一的に扱うのかが明確にはなっていない。同じ理由で、今回「タラワ」の機能を分類する際に用いた「行為遂行による聞き手の利益」「行為遂行の聞き手の意志」「話し手による行為の強制力」が他の文末詞等の表現に対する有効性を確認する必要がある。また「タラワ」が命令の機能を持つのは、「タラワ」が話し手の願望の表出機能を持っており、その願望を聞き手にかなえてもらうことになる結果である。この間接的に命令の機能を果たすことで、直接動詞の命令形を使用するよりも緩やかな命令を達成している。この方法は「タラワ」だけでなく、「デ」のような文末詞を使用するときにも使用されている。今後は他の表現との比較も視野に入れていきたい。

最後に今回分析には含められなかったが、興味深い事例を挙げる。

- (63) モシ ヒマダッタラワ？
もし 暇だったら？
- (64) モシ コレタラワ？
もし 来られたら？
- (65) モシ ウカッタラワ？
もし 受かったら？
- (66) モシ ハチジマデニ ツイタラワ？
もし 8時までに着いたら？

(63)から(66)までの例は、非意志的な(助)動詞が「タラワ」と現れている例である。(63)は「暇だ」、(64)は「来られる」、(65)は「受かる」、(66)は「着く」がそれぞれ非意志的な表現である。3.1節で見たように、本来「タラワ」は非意志動詞とは共起出来ないはずであるが、特別な形式である「モシ～タラワ？」の場合には問題なく共起している。この形式は、意味は「～たらどうする？」「～したらどう思う？」を表し、聞き手から意見を引き出そうとする機能を持つ。「モシ」が現れていることから分かるように、この場合の「タラワ」は「仮定条件」を表す「タラ」に由来する。この表現において、今回本論文で扱った「タラワ」と同じものが、「モシ」とともに現れて、「推奨」「提案」「命令」とはまた別の機能を表しているのか、もしくは別の「タラワ」なのか現在のところ解明されていない。これらの分析も今後の課題としたい。

謝辞

本稿の執筆のもとになった調査の際に協力してくださった徳島方言の調査協力者の方々に厚く御礼申し上げます。また査読者の方には有益な視点を頂いたことに御礼申し上げます。なお本稿における誤りはすべて筆者の責任に帰すものである。

¹ 査読者の方から、「話し手指向」と「聞き手指向」を軸に考え、「推奨」「提案」「命令」を階層として設定すると、「提案」がタラワの中心を占める機能とみなせるという指摘があった。この観点からのタラワの検討を今後の課題の一つとしたい。

文献

- (1)白川博之, タラ形・レバ形で言いさす文, 広島大学日本語教育学科紀要, 5 号, 1995, p33-41
- (2)高田豊輝, 徳島の方言, 教育出版センター, 1985
- (3)金沢治, 阿波言葉の語法, 徳島市中央公民館附属図書館, 1961
- (4)森重幸, 徳島県の方言, 講座方言学 8 ―中国・四国地方の方言―, 1982, p317-365
- (5)平山輝男・上野和昭編, 徳島県の言葉, 明治書院, 1997
- (6)元春英, 会話の文末における「-タラ」「-バ」の終助詞的用法--発話行為と対人関係から, 言葉と文化, 11 号, 2010, p199-216